

## No.50 ジョゼフ・コースス 「呪文、ノエマのために」 二つのテキスト原文

### 石牟礼 道子 「椿の海の記」

人の言葉を幾重につないだところで、人間同士の言葉でしかないという最初の認識が来た。草木やけものたちにはそれはおそらく通じない。無花果の実が熟れて地に落ちるさえ、熟し方に微妙な違いがあるように、あの深い未分化の世界と呼吸しあったまんま、しつらえた時間の緯度をすこしずつふみはずし、人間はたった一人でこの世に生れ落ちてきて、大人になるほどに泣いたり舞うたりする。そのようなものたちを作り出してくる生命界のみなもとを思っただけでも、言葉でこの世をあらわすことは、千年たっても、万年たっても出来そうになかった。

### ジェームス・ジョイス 「若い芸術家の肖像」

この映像を思い浮かべて、彼は奇妙な暗い思索の洞窟を垣間見たが、すぐそこから目をそむけた。まだあの中に入って行く時ではない。この友人のものうげな様子は、きちがいなすのように、周りに希薄な毒気をまきちらすように思われた。そして彼が次から次へ右や左に現れるかりそめの言葉に視線を投げながら歩いていくと、それがみなその場限りの意味を失って沈黙し、しまいには下らぬ店看板が彼の心を呪文のように金縛りにする。そういう死語のうず高い山をよけながら横町を歩いていくにつれ、彼は老衰のせいで吐息をつき萎えていくのを、虚ろな驚きの気持ちで見っていた。彼自身の言葉の意識が脳裡から潮のように退き、言葉そのものに細かい流れとなってしみ入ってくると、言葉はとりとめのないリズムで結び合わされたり、解き放たれたりした。